2023年1月22日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

とっておきの時間を

［ルカによる福音書6章～11節］

ある安息日に、イエスが麦畑を通って行かれると、弟子たちは麦の穂を摘み、手でもんで食べた。ファリサイ派のある人々が、「なぜ、安息日にしてはならないことを、あなたたちはするのか」と言った。イエスはお答えになった。「ダビデが自分も供の者たちも空腹だったときに何をしたか、読んだことがないのか。神の家に入り、ただ祭司のほかにはだれも食べてはならない供えのパンを取って食べ、供の者たちにも与えたではないか。」そして、彼らに言われた。「人の子は安息日の主である。」また、ほかの安息日に、イエスは会堂に入って教えておられた。そこに一人の人がいて、その右手が萎えていた。律法学者たちやファリサイ派の人々は、訴える口実を見つけようとして、イエスが安息日に病気をいやされるかどうか、注目していた。イエスは彼らの考えを見抜いて、手の萎えた人に、「立って、真ん中に出なさい」と言われた。その人は身を起こして立った。そこで、イエスは言われた。「あなたたちに尋ねたい。安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、滅ぼすことか。」そして、彼ら一同を見回して、その人に、「手を伸ばしなさい」と言われた。言われたようにすると、手は元どおりになった。ところが、彼らは怒り狂って、イエスを何とかしようと話し合った。

[１] ‟聖日厳守”の言葉の裏で

今日の聖書の箇所を見ていると、私たちがつい陥りがちな信仰生活のことが書かれているなあ、と思います。私たちが自由に神様の恵みに応答して生きる、ということが、ひとつの習慣やルーティーン（習慣自体が悪いと言うことではありません）になり、それが「測り」のようなものになって、自分自身も、また他者をも縛っていく、という様に変質していくということがあるように思います。そうすると、もちろん主日礼拝は大事なのですが、その礼拝の「心」が失われて、言葉は悪いですが、自己満足の様な礼拝になってしまいかねません。

今日の箇所を見ても、いつもイエス様の周りには、自由と喜びがあったのだなと思います。麦畑の中を弟子たちと一緒に、麦をつまみ食いして歩いたり、手の自由が利かない人の手を癒されて、その人に深い喜びを与えて下さいました。そのどちらもが安息日のことであったので、これは「労働」にあたる、つまり安息を守っていないということで、律法厳守のファリサイ派の者や律法学者たちは「怒り狂った」（16節）とさえ書いてあります。彼らは、神様に近いと自負していた者たちですが、自由と喜びが失われていますよね。

私は、例えば、‟聖日厳守”という言葉は言わないようにしています。聖日を守りたくても守れない人は沢山います。今日も私たちは、外で働いている人たちに助けられて礼拝に来ているかもしれませんし、仕事も、現代はお互いのための、時間のフレックス化やシフト性が普通のことになっているので、むしろ教会の方が旧態依然のようになっているということがあるように思います。

[2] 形式ではない「安息日」

たしか、「かみさまへのてがみ」という、神様に対する子どもたちの短い言葉を集めた絵本の中に、「かみさま、いつねむっているんですか？」というほほえましい手紙の言葉が載っていたと思うのですが、考えてみたら、休みがない神様って大変ですよね？神様、働きすぎか？って素朴に思います。でもどうなのでしょう。聖書の「創世記」の初めには、神様は天地創造の第七日目に、すべてのわざを完成されて「安息」なさったとあります（創2:2）。けれどもまた違う箇所には「見よ、イスラエルを見守る方はまどろむことなく、眠ることもない」（詩編121:4）とも記されています。どっちが本当なのでしょう？―どちらも本当なのだと思います。神様は、それこそ‟寝ずの番”をして私たちにたえず目を注がれていらっしゃると思います。そう言った意味で言うと、神様は休んでおられないとも言えます。では、「安息」とは、何なのでしょうか？旧約の申命記の中にこのような言葉があります。―「あなたはかつてエジプトの国で奴隷であったが、あなたの神、主が力ある御手と御腕を伸ばしてあなたを導き出されたことを思い起こさねばならない。そのために、あなたの神、主は安息日を守るように命じられたのである」（申命記5:15）。

ここで言われていることは、神様のみわざを思うことへの招きではないでしょうか？決して、律法主義的な意味で「安息日厳守」、その日を守っていれば合格、というようなことではなくて、安息日というのは形式的なことではなく、もっと神様との「愛のやりとり」が、そこにある大事な時間のことなのだということだと思います。ですから形式的に安息日を守っていても神様から離れているということもあるし（今日の物語が正にそうですよね）、安息日に会堂に来ることが出来なくても、神様と深く交わる、ということは十分あります。（もっとも、共に礼拝を捧げるということの大事さも勿論あることは皆さんよくご存じの通りです）。大事なのはやはり、ハート・心なのだと思います。イエス様は私たちの心を愛するし、また心を見抜いてもおられる方だと思います。

[3]　愛する者に手紙を書くように

私はそのことからも思うのですが、神様は第七の日に安息されたとありますけれども、何にもなさならかったということではないと思います。何をなさったのか。それは、手足を使う労働ではなく「心」を使ったのだと思います。すべてのものを完成され、満足され―人間的な言い方をすると―恋人を思ったり、或いは子どもや孫たちを愛おしく思ったりするような、そのような思いで人間を愛の目眼差しで愛して見ている日、それが第七日なのではないかと思うのです。まず、神様の愛が先行しています。神様がどんなに私を愛して下さっているか、イエス様がどれほどの愛を注いで十字架にかかって下さったのか…。そして、その愛を私たちも静かに思う。ほかの事は手を休めて、「思う」ことに心を注ぐ。それが「安息日」なのではないかと私は思います。それは、ちょうど愛する者にラブレターを書くようなことに似ているのかもしれないと思いました。あの人も私を愛してくれている。それは疑っていない。しかし、その方のことを心に想像して、感謝して、或いは心配して手紙を書くということをイメージして頂ければよいかなと思います。その時間って、直接会ってはいなくても、それ以上に心が嬉しい、満たされた時間ではないでしょうか!?　…翻って思うことは、結構私たちって、身近で会っていても、その人のことに心を費やすことをしないということがあるのではないかということです（私の反省です）。まず、そのことも大事にしたいと思いました。

神様は、私たちに「思ってほしい、忘れないで欲しい」と訴えているのだと思います。「わたしがこんなにあなたのことを思っているのだから」と。イエス様はおっしゃいました。「わたしは世の終わりまでいつもあなたがたと共にいる」（マタイ28:20）。これは神様からの愛の宣言です。もうわたしとあなたは一体化しているって言うのです。あなたが歩くその道には、必ず私の足跡もついているのだよ、と言うのですね。そうであれば私自身の、あなた自身の「安息日」を大切にしたいと思います。神様がまず、私たちのことを思う安息日を作って下さったのですから。それは人生の中で、とっておきの時間だと思います。お祈り致します。

主なる神様、今日、この礼拝であなたの愛の中に「安息」を頂くことが出来て感謝致します。あなたは、ただご自分だけで存在されるのではなく、全ての被造物、とりわけ私たち人間をあなたの愛を注ぐ相手として下さっています。それは、あなたが独り子を十字架にかけるほどの愛です。どうか、私たちが、まず私自身のことを思って下さるそのあなたのことを、恋焦がれるような思いを持って静かに、深く思う、その時間を、日常の中で、またイエス様の復活を覚える主日の中で大切にしてゆくことが出来ますように。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。